慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	W・F・ヴェルトハイム著『東洋と西洋の並行』：現代アジアへの社会学的アプローチ
Sub Title	W.F. Wertheim : East-west parallels, 1964
Author	川合, 隆男(Kawai, Takao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1966
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.39, No.1 (1966. 1) ,p.103- 109
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19660115-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

W. F. Wertheim: East-West Parallels: ——Sociological Approach to Modern Asia——

W. Van Hoeve Ltd-The Hague, 1964, vii+284pp

W・F・ヴェルトハイム著『東洋と西洋の並行』——現代アジアへの社会学的アプローチ——

一、著者ヴェルトハイムはオランダ人の学者で現在アムステルダム大学の東南アジア現代史及び社会学の教授であり、過去十五年間のインドネシア滞在を通じて、彼の主要な研究はインドネシア社会に注がれているが、東南アジア研究者としては広く知られているところでもある。著者は本書の他に'Indonesian Society in Transition; A Study of Social Change, Bandung and the Hague. W van Hoeve, 1959. 編集者として Indonesian Economics; the Concept of Dualism in Theory and Policy, the Hague, 1961. 等がある。ところで、本書はほゞ一九五八年から一九六二年までの間に別々の機会に内外の大学で講義をしたものや、諸国際学会で発表、講演したものを新たに英語本にまとめて公刊されたものである。従つて、その性格からして多少とも重複する個所がないでもないけれども、「まえがき」に述べられているように、本書の一貫した主題は「西欧において学問として生れ、殆んどが西欧の社会構造や制度に適応された社会学が、アジアにおいて emerging nations の研究のためにどの程度の概念的枠組を与えるものなのか」という意欲的な課題設定であり、現代アジアの直面している複雑多岐な諸問題を多少とも理論的に解明しようとするとき、また社会学的諸概念の再検討を敢えて試みようとするとき、本書は確かに大きな問題を投げかけているわけでそれだけに興味津津たるものがある。

二、まず本書所収の論文を章順に掲載しておこう。

1 A Sociological Approach to the Problems of Underdevelopment
2 Society as a Composite of Conflicting Value System
3 The Trading Minorities in Southeast Asia
4 Nationalism and Leadership in Asia
5 Sociological Aspects of Corruption in Southeast Asia
6 Religious Reform Movement in South and Southeast Asia
7 Religion, Bureaucracy, and Economic Grouth
8 Urban Characteristics in Indonesia
9 Inter-Island Migration in Indonesia
10 Social Change in Java. 1900-1930.

11　The Sociological Approach to Indonesian History
12　Betting on the Strong？

ここでは、所収された論文を全て取り上げることはしないで、特定の国を対象としたものよりも比較的アジア全体に共通する課題を内容としている数論文を拾つて、その内容紹介及び検討を試みたい。

第一章「低開発問題への社会学的アプローチ」では、まず低開発国乃至後進国問題の一般的性格から論じられる。これらの諸国に共通した特徴は低い労働生産性、自然力への依存という技術的、経済的発展の低水準と、生活の不安定性が最大限の統合、相互扶助の伝統的な生活体系を求めるという社会的性格とにあるとされているが、ヴェルトハイムは問題の状況を世界史的観点で考察しなければならないことを強調する。"developed world" と "underdeveloped world" との区分設定によつて(今日の「南北問題」がそれであろう)、現在「後進世界」自身の内でその「低開発」乃至「後進」に気がつき、この状態に不満を示しその意識がますます深く浸透し始めている。従つて、この問題を現在の「東洋」と前工業化段階の西洋とを等しく同列に論ずることは出来ないのである。

世界に既に先進的な部分（国々）が存在するということは、いまだそうでない部分への挑戦となり、その挑戦への対応はある意味で相対的な均衡を破壊することになる。従つて研究の方法論上から云うと、静態的構造・条件の角度から後進社会へ社会学的に接近するということでは不適切なわけで、それらの社会で起つている動態的なプロセスの理解が必要となり、また単なる量的な把握にも限界がありもつと質的な把握を試みていかなければならないことになる。その点ではJ・H・ブーケの、高度に資本主義的な体系と前資本主義的体系の並存という後進社会の社会経済的特徴づけや、新進の社会人類学者C・ガーツの、種々の方法で導入された資本主義的刺激に対して人々は伝統的諸構造・制度を固定化させることによつてのみ反応し得たという、所謂ここでの発展が一つの進展（エボリューション）ではなく後退(involution)として特徴づけられるという研究、また、J・ロメインの、オリジナル・モデルにおいてなされなければならなかつた多くの回路を避けて、より短期間にあるプロセスが展開し得るという「進歩の弁証法」等は極めて示唆に富むものと云えよう。

このように考えてくると、現在後進社会での推移は西欧で展開されたのと同じ方向で進められる必要性はもたない。従つてヴェルトハイムはロストウ理論についても、その社会経済的発展の普遍的パターンを当然視していることに触れて、時間的要因が異つた社会でもつ固有な性格についての説明を欠いていること、また後進段階からより発展した段階への最短路の可能性、あるいは逆に後退現象の無視を鋭く指摘する。ここではヴェルトハイムは東洋社会への社会学的考察を通じて、彼なりに西欧人の自己満足に一つの警告を発していると云えよう。

第二章「葛藤する諸価値体系の構成体としての社会」では、第一章と同様多くは後進社会研究の方法論がとりあげられる。即ち、古典的な社会人類学の社会を本質的に有機的な全体として捉えるか否

かの論争を素描して、ラドクリッフーブラウン、マックス・グラックマン、V・W・ターナー、E・R・リーチ等の見解を検討し、著者自身としては如何なる社会においても基礎的な対抗諸要素は潜伏し継続されるもので、それらが支配的構造内にあつて基礎的変化を生みだす傾向を担つているとみる。また、社会変動のプロセスについてもその社会の不安定な諸観念体系の一連の相互浸透であるとするが、そこには制度化の過程もあるわけで統合的機能をも認めている。

以上のような観点からして、所与の社会についての純粋にシンクロニックな意味での構造記述は不適当であり、葛藤する価値体系はダイアクロニックな展望においてのみ理解され得る。更に、われわれが現地調査をなすにあたつては次のような点に留意しなければならないという。第一に所与の社会の継承された構造に注意を払うのではなく、その社会の異つた諸層において採用されている価値体系に注意を払わなければならない。第二にその社会の異つたシグメントの成員が全体として社会をどう観ているかということを学ばなければならないという点である。後進社会の深層をえぐる、しかもその動態に着目した極めて示唆に富む考察と云える。

第三章「商取引に従事する東南アジアの少数民族」。東南アジアの多くの新興独立諸国は少数民族・人種問題を抱え、その挑戦を受けている。しかもそれらの問題は植民地支配の歴史と複雑にからみ合つて提起されているだけに、容易には解決され得ない。また、少数民族・人種たらしめる根拠も必ずしも一様ではなく、地域的・政治的・社会的・経済的・宗教的・人種的マイノリティ等々の理由から各々の社会が少数民族・人種問題を潜在化して来たわけで、尚且つそれぞれが歴史的経緯をもつて複雑な様相を呈することになる。

本章では特に華僑（華商）の問題に関心が払われている。従来、社会学理論に基いて少数民族問題や華僑、印僑問題に接近しようとする試みは非常に少なかつたので、この点でも興味深い。しかし、ここでは社会史的な考察がより大きな比重を占めているようである。中国人に対する差別は、東南アジア史においては新しい現象ではなく、現在でも社会的、法的な差別が盛んにおこなわれているが、今世紀初頭からの中国共産党の抬頭、それに続く今日の中国本土の強大化にともなつて東南アジア諸国の華僑政策は極めて微妙な立場に立たされて来た。政治的独立は達成されたものの、自らその統一国家のもとで後進性から脱却し経済発展を軌道に乗せることが、如何に困難な課題であるかは明らかである。東南アジアの人々の間に成長して来たナショナリズムは植民地権力だけに向けられたものではなく、国内の中国人にも向けられたが、華僑の彼等だけの固有社会、組織的生活の維持がみられるとはいえ、当該社会においてその経済機構に彼等がすつかり定着してしまつているのが事実である（東南アジアに現在千三百万人の華僑がいるといわれている）。そこで著者ヴェルトハイムは次のように主張する。即ち、中国人を追い出すことが、これらの国々を襲つている害悪に対する経済的解決をもたらすことにはならない。計画化した発展過程を急速に歩もうとするなら、あらゆる種類の少数民族の能力を充分に利用すべきで

あることを結論としている。

第四章「アジアにおけるナショナリズムとリーダーシップ」。ここではアジアにおけるナショナリズムやそのリーダーシップの性格の歴史的背景が検討される。大きく分けて、三つのことが問題にされていると云える。一つにはナショナリズムは世界史においては確かに一九世紀来の近代的現象であるが、西欧諸国のナショナリズムの性格と、非西欧のそれとの相違を理解しようとしている。その場合、西欧諸国では第三階級（中産階級）を母体とした広範な担い手によつて統一国家の形成が促され、やがては植民地主義や帝国主義と結びついていつたのに対し、非西欧諸国では西欧列強の支配下から脱却しようと試み、またそれらに対抗せんがために、ナショナリズムが多くは西欧モデルを模造したイデオロギーとして導入されたという特色をみることが出来る。

二つにはアジアにおけるナショナリズムの生成過程を考察することにあてられている。主にインドネシアやインドの事例が対象となつている。インドネシアの場合には、オランダは所謂「安寧と秩序」に典型的にみられる土着の伝統的な支配・統治形態を維持して間接統治を展開したが、これに対して土着の人々は、まずジャワ戦争や後の西スマトラでのパドリ戦争にみるようにイスラム教による宗教的反抗（地方の王族、宗教的指導者、農民が中心）を繰り返すが、一九世紀末になると先の伝統的なエリート・グループとは異なる新しい社会集団（ニュー・ブルジョアジー）が抬頭する（西欧の第三階級とは性格は異なるし、商人や自由職業者は極めて少数である）。彼等は伝統的な貴族的価値観と調和する形で官僚層、軍人からなるが、西欧からの近代的な組織形態や表現形態を備えている点で伝統的エリートとは異なる。そして、彼等はこの近代的な組織形態とナショナリズムというイデオロギーをもつて反植民地運動のリーダーシップをとり、あらゆる種類の統合（特に宗教的アッピールが強い）を推進していつた。そこではナショナリズムは効果的な闘争のための共通のプラットホームを提供し得たわけで、内部的な利害の潜在的対立は政治的な独立達成後までもちこされたのであつた。他方、先のニュー・ブルジョアジーと称される第三階級の出現後、まもなくして第四階級（the fourth estate）が登場して来ることによつて戦列は複雑化し、国家的統一に対して抱くイメージも必ずしも一様ではなかつた。

さて、三つには、現在のアジアのナショナリズムとそのリーダーシップの性格について素描する。ヴェルトハイムはその特徴として現代の非西欧諸国のリーダーシップは統一的であるよりも、分断と分裂の傾向が著しいことを指摘する。かと云つて、次のような教訓を引き出すことも忘れてはいない。過去において内部的分断のうちに横たわつていた国民感情や力の強度を低く評価したことが賢明でなかつたと同じように、現在皮膚の色による人種差別や帝国主義の継続の問題が残つているところでは、分断された諸力が共通の行動、同情のために容易に統一され得るのであり、またバンドン精神の力をも過少評価すべきでない、と。

第六章「南及び東南アジアにおける宗教改革運動」。M・ウェー

バーを含めた宗教社会学者がアジアの宗教をとりあつかう時には、概してこれらの宗教が初期的で伝統的な形態をもつという位置づけをなして捉えようとして来た。従つて、これらの宗教内の改革運動の展開等にも充分な注意が払われなかつた。もつとも、M・ウェーバーやR・H・トーニー等によつて特殊な関心は抱かれたが、それらはProtestant Movementとの決定的なアナロジーによつて試みられたのであつた。

そこでヴェルトハイムは、アジアの宗教改革運動の発展と西欧のそれとの間にみられる並行(parallels)と分岐(divergences)を探り出そうとする。イスラム教、ヒンズー教、仏教の改革運動について、その諸段階を設定して詳細に分析しているけれども、ここで詳しく紹介出来る紙数がない。東洋の諸宗教内の新しい傾向とヨーロッパのプロテスタントの勃興との比較は部分的にのみ正当視される。われわれが並行現象(類似現象)をもし認めるとしても、一七世紀と二〇世紀における発展の間の時間的な大きな距離による、重要な差異を考慮しなければならないであろう。

第七章「宗教、官僚制、経済成長」。ここではM・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』での問題提起に従つて論が展開されている。ここでのウェーバーの基礎的問題は、近代的な工業世界が何故西欧のみに生れたかを説明しようとすることであつた。彼は資本主義的方法以外の他の方法については考えなかつたように、比較し得る社会的経済的諸条件を除外して資本主義精神の誕生を説明する西欧の心理的諸原因を探求した。そして、これによつて東洋社会のあらゆる類型から区別するものを宗教的価値に求めたのであつた。

そこでヴェルトハイムは自国オランダの一七世紀共和国黄金時代、更にN・ヤコブの『東アジアにおける現代資本主義の起源』の研究、R・N・ベラの『徳川時代の宗教』の研究等にみる中国と日本の比較考察、C・ガーツの『ジャワの宗教』のジャワ社会での考察をとりあげて、ウェーバーの問題提起に応えようとし、その修正を示唆する。即ち、著者自身は次のような問題提示をする。東洋は何故西欧の場合とは異つた近代的発展の道を辿ろうとしているのか？　西欧で起つたことについての説明がアジアでの最近の経験をもとにしてどの程度に修正されるべきなのか？　ということである。そして、ここでの比較考察の一応の帰結としてヴェルトハイムは経済的進歩の主要な動因としての資本主義の精神と結合したProtestant ethicは、国家への忠誠と結合した、まじめで抑制的なhumanismによつて置きかえられるのではないかという提案をする。

続いて第八章、第九章、第十章では、インドネシアの都市の性格、内部移住、一九〇〇年から一九三〇年までのジャワの社会変動等をとりあげて、全体として、中途の解決策は全く何らの解決をも証明するものではなく、aux grands maux les grands remédes（病重ければ薬また激し）という諺に裏書をされるような現状の病状診断をする。また、第十一章「インドネシア史に対する社会学的アプローチ」では社会学的類型といつたものの使用が歴史家にとつて一般にどの程度まで許されるのかといつた問題が主に検討される。社

会学者が現実態を分析していく際に、gemeinschaft-gesellschaft, popolo grasso-popolo minuto, santri-abangan, landowners-landless people, Western-Eastern, universalism-particularism と云つた二分法による単純化を試みることによつて、歴史体の特殊な諸要因を過度に見逃したり、よりダイナミックな側面を見落したりする危険性を同時にもつているわけで、そのことでも歴史学者と社会学者の協力が要請されている。逆に歴史学者にとつても社会学的考察に大いに学ばなければならない点も出て来ると云つたら云い過ぎになるであろうか。

第十二章「強者にかけるか？」は、本書のために新たに書き加えられた章であつて、主に将来の予測、政策形成等に関心が向けられている。非西欧世界でのテイク・オフの困難さはしばしば指摘されているところである。多くの人々によつて指摘されているように、農業生産性の低水準、貧困、無知の悪循環、政府機関の計画に対する反応の欠如は確かに経済発展に手痛い障害となつているわけで、そこで経済的社会的開発の実際の担い手を農村社会のどの層(agents)に求めるかということが、著者ヴェルトハイムのいう強者にかけるか否かの主題である。その際、特定の富農層、あるいは進歩的農民とされる層を担い手層として知識や技術的進歩を漸次普及させようとするのが、従来しばしばとられてきた政策であつた。現にインドの "progressive farmers" を中心とした農村開発計画でもそうであるし、インドネシアの hadjis もこの層の中心であつた。しかし、これらの層の人々が農村社会で必ずしも受容された指導者ではなかつたこと、またその政策のもとでの現実の過程で一般農民大衆がますます低滞せざるを得なかつたし、全体として後退現象の傾向をすらみせていることの諸点に照らして、ヴェルトハイムは中共等の革命における貧農の本質的役割を高く評価する政策路線を改めて再評価しようとしているようである。

即ち、将来の考えられ得る政策は一般農民大衆にかけることであり、彼等こそ集中的な教育と組織とを通じて力強く立上るであろう。the backward masses こそが潜在的な力を宿しているのだと云う。著者のこれまでの極めて大胆で、しかも入念な、アジアの歴史的側面、現状に対する分析から引き出された一つの洞察である。

三、以上本書の内容を極く簡単に紹介してきたが、筆者はここで本書の批評を試みることには些かためらいを感ずる。何故ならヴェルトハイムが捉えんとした主題、即ち西欧において学問として生れ、殆んどが西欧の社会構造や制度に適応された社会学が、アジアにおいて新興諸国の研究のためにどの程度の概念的枠組を与えるものなのかという主題は本書の各章で具体的に検討されているとは云え、極めて大胆で意欲的な試みであるだけに簡単に論評を下すことは出来ないように思えるからである。事実、われわれはここで展開されたような問題提示の仕方には不慣れのような気がする。しかし、特にアジアに適用されてきた既成の理論的枠組を再検討するという仕事は今後是非とも要請される研究課題であることは疑いの余地がない。

ところで、著者ヴェルトハイムが本書で追求した東洋と西洋の

parallels という際の parallel は、実は非常に広い意味に用いられている。初めの第一章や第二章の主に方法論をとりあつかつた部分では社会進化における各々の社会の並行という考え方に立つていると思われるが、後の第七章「宗教、官僚制、経済成長」のところなどでは、その類似性の面が強調されている傾向がないでもない。W・E・ムーアは社会変動を論じてその中で工業化、近代化が当該社会にもたらす傾向を、一つには全体を通じて諸工業社会に共通する構造的諸局面が拡大しその等質性へ漸次集中し類似性を共有する側面 (convergence)、他方、種々の理由から変化の「軌道」は常に一定のものではなく分岐することもありうるわけで、社会によつてさまざまな局面をもつ側面 (divergence) とに求めている (Social Change, 1963, Prentice-Hall)。このムーアの考え方とヴェルトハイムの考え方を対照してみると、ムーアの場合にはどちらかと云うと原因—結果の因果関係を基底とする cultural evolution を当然視しているかのようである。ところがヴェルトハイムは、convergence-divergence 図式の代りに parallel に広い意味をもたせて論を展開し、社会進化についての考え方もムーアとは異なる。各々の社会の並行現象や類似現象を指摘するとき、必ずしもそれらにおける因果的な結びつきが前提とされないし、一定の発展方向・コースに集中収斂せしめられないのである。かと云つて、文明論とも区別されるものと考える。筆者自身の考え方を裏づけようとするきらいがないでもないけれども、本書の「並行論」をここでは以上のように理解しておきたい。

M・ウェーバーに対する疑問やJ・S・ファーニヴァルの「複合社会論」についての疑問もかなり具体的に提示されている。しかしながら、アジアの社会での現実の動向、実態についての分析なり検証がその点でやはりまだ不充分なのではなかろうか。また、比較研究の必要性が一層痛感される。

ともかく、本書は、現在のアジア研究において一方では公式化された理論図式や概念的枠組が専らとされ、他方では特殊な個別的なテーマが研究課題とされる傾向が著しいとき、われわれに鮮かな新風を送り込む著書とはならないものだろうか。

—四〇・九・十四—（川合隆男）

Robert C. North and Xenia J. Eudin
M. N. Roy's Mission to China
——The Communist-Kuomintang Split of 1927——

University of California Press, Berkeley and Los Angeles, California, 1963 vi+399pp.

R・C・ノース
X・J・ユージン
『第一次国共合作の分裂と中国におけるM・N・ロイの任務』

一

本書は、一九二七年一月に成立し七月に崩壊した武漢政府の時